2010/11/30　　第6回音韻論フェスタ　発表要旨

「日本語複合語における形態-音韻二重多様性」

西村康平
愛知淑徳大学

本発表の目的は、日本語文法辞書における語彙クラス（和語、漢語、外来語など）が、複合語形成において重要な役割を果たしていること指摘することである。複数の種類の複合語形成パターンに関するデータを観察し、語彙クラスによって可能なパターン、不可能なパターンがあることを指摘する。またそうした形態的多様性を語彙クラス間の音韻的多様性と比較し、それらの相違および関連性に関して考察する。

これまで生成音韻論の枠組みにおいて、日本語の音韻辞書における階層構造に関して活発な議論がなされてきた(McCawley 1968, Ito & Mester 1995, 1999, 2003, Fukazawa, Kitahara, & Ota 1998など)。特に、語源的情報に起因する和語、漢語、外来語といった語彙クラスに関して、音韻構造の多様性は広く注目を集め、語彙クラスの心的実在性、分類、理論的説明などに関して多くの提案がなされてきた。そうした研究では連濁や複合語アクセント規則などの複合語形成に伴って現れる音韻現象が多く取り上げられてきた一方で、複合語形成そのものと語彙クラスとのつながりに関しては、それほど多くの議論がなされてきたとはいえない。

本発表では日本語における主要な複合語形成として、通常の複合語（normal compounding）、並列複合語（dvandva compounding), 重複複合語(reduplication)の三種類を取り上げる。これらのパターンはさらに幾つかの下位パターンに分類することができるが、それらの形成可能性は構成要素の語彙クラスに依存している。すなわち、和語クラスに属する語彙は多くのパターンの複合語形成が可能であるのに対し、外来語クラスでは限られた一部のパターンでのみ形成可能である。形態構造に大きな制限を有する漢語クラスでは特有の複合語形成パターンを見せる。こうした形態論的多様性は、和語クラスには制限が多く、外来語クラスには制限が少ないという音韻構造における多様性とは大きく異なった傾向を示している。

今回の研究発表の内容は日本語および他の自然言語における辞書構造の研究に関して新たなデータおよび観点を示し、今後の研究発展に大きく寄与すると考えられる。